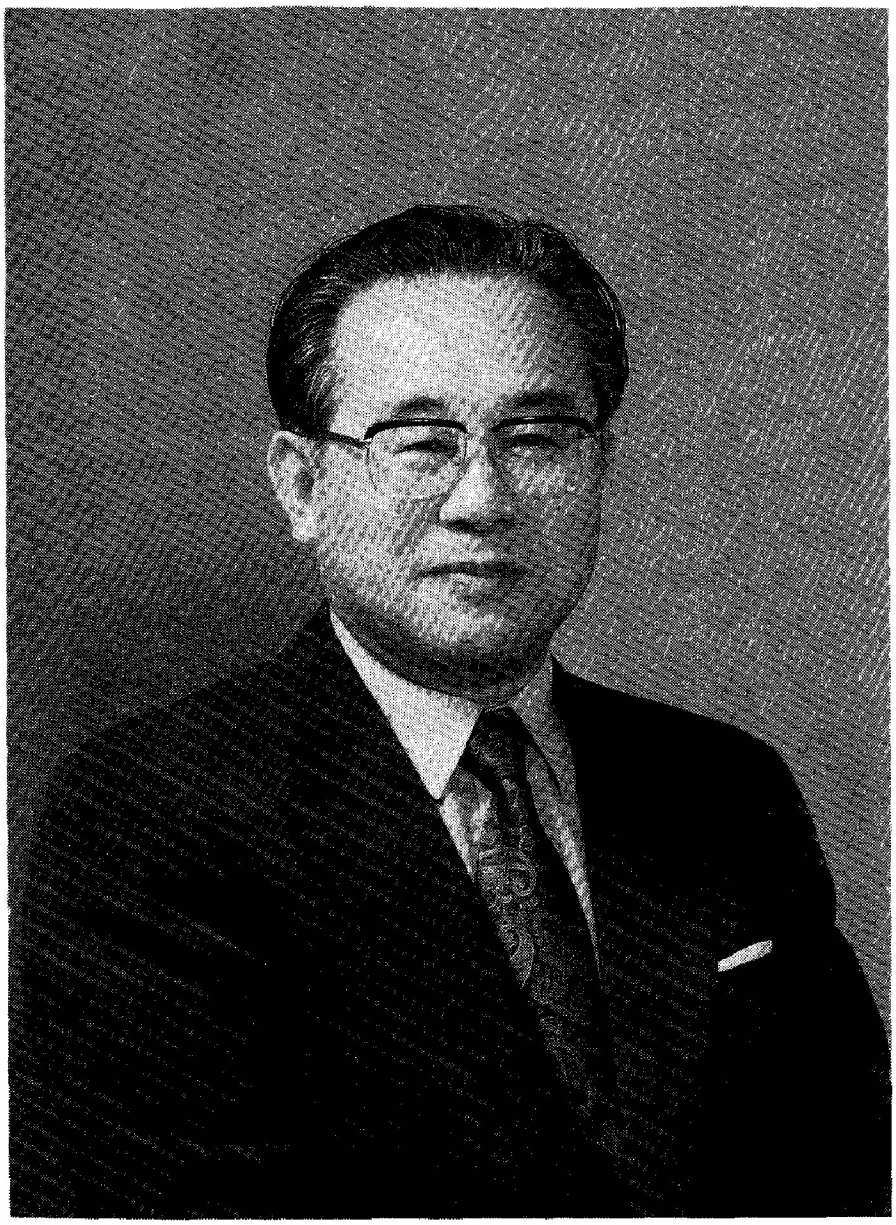

梅田倍男教授近影

略　　歴

梅　田　倍　男

生　年　月　日　昭和７年９月18日生

現　住　所　愛知県愛知郡日進町
南ヶ丘１－25－５

学　　履

昭和26年４月　広島大学教育学部外国語科（高校課程）入学

昭和30年３月　同　上　　卒業

昭和30年４月　広島大学大学院文学研究科（英文学専攻）修士課程入学

昭和32年３月　同　上　　修了

職　　歴

昭和32年４月－昭和36年３月　広島県立高等学校教員

昭和36年４月　愛知大学教養部講師

昭和41年３月　同　上　　退職

昭和41年４月　愛知教育大学教育学部講師

昭和42年12月　同　上　　助教授

昭和50年３月　同　上　　教授

昭和51年９月－昭和52年８月　文部省在外研究員としてバーミンガム大学シェイクスピア・インスティテュート及びフォルジャ・シェイクスピア・ライブラリーでシェイクスピア研究に従事

平成４年10月　広島大学から博士（文学）の学位を授与

平成６年３月　愛知教育大学退職

〔著書〕

1．シェイクスピアのことば遊び（学位論文）　平成元年　英宝社

〔訳書〕

1．変容する英語　昭48年　研究社

〔学術論文〕

1．'Subjunctive-equivalent' について　昭37年　愛知大学紀要「文学論叢」第23輯

2．*Doctor Fausts* 試論－言語と表現の立場から　昭38年　愛知大学紀要「文学論叢」第24輯

3．Notes on Marlowe's Adjectives－from the standpoint of word-formation　昭39年　愛知大学紀要「文学論叢」第26輯

4．A Historical Observation on the Perfect Tense　昭41年　愛知大学紀要　「文学論叢」第31輯

5．Verb-adverb Combination in *NEB*　昭42年　愛知教育大学　「外国語研究」7

6．On Paired Words in Christopher Marlowe　昭43年　愛知教育大学「研究報告」17輯

7．Richard Ⅱの言語　昭44年　愛知教育大学　「研究報告」18輯

8．The Language of Chaucer's *Pro-*

logue to the Canterbury Tales: The Two Aspects　昭46年　愛知教育大学　「研究報告」20輯

9．『マクベス』－1幕7場の独白の解釈　昭48年　愛知教育大学「研究報告」22輯

10. 地口(バン)思考　昭49年　英語文学世界(英潮社)

11. シェイクスピアの言語意識－その一面　昭50年　英語青年（研究社）

12.『コリオレーナス』とことばの主題　昭54年　愛知教育大学「外国語研究」16

13. 道化と地口　昭55年　「吉田弘重先生退官記念英米文学語学研究」(篠崎書林)

14. シェイクスピアの言語遊戯序説－地口と詩－　昭56年　愛知教育大学「外国語研究」17

15.『リア王』論　昭57年　愛知教育大学　「外国語研究」18

16.『マクベス』－Equivocation の主題と表現(1)　昭57年　愛知教育大学「研究報告」第31輯

17.『マクベス』－Equivocation の主題と表現(2)　昭57年　愛知教育大学「研究報告」第32輯

18. *Love's Labour's Lost* における言語の饗宴　昭57年　「丹羽博士還暦記念論文集」(金星堂)

19. *Richard* Ⅱ と言葉の主題　昭57年　「桝井迪夫先生退官記念英語英文学研究」(研究社)

20.『ハムレット』論－play の主題(1)　昭58年　愛知教育大学　「外国語研究」19

21.『ハムレット』論－play の主題(2)　昭59年　愛知教育大学　「研究報告」第33輯

22. シェイクスピアの修辞と地口　昭59年　愛知教育大学　「外国語研究」20

23.『オセロウ』試論－信仰と理性(2)　昭60年　愛知教育大学　「研究報告」第34輯

24.『オセロウ』試論－信仰と理性(2)　昭60年　愛知教育大学　「外国語研究」21

25.『トロイラスとクレシダ』論－チョーサーからシェイクスピアへ　昭61年　愛知教育大学　「外国語研究」22

26.『ロミオとジュリエット』論－愛と死　昭61年　愛知教育大学「研究報告」第35輯

27.『アントニーとクレオパトラ』における道化のことば　昭62年「松元寛先生退官記念英米文学研究」　(英宝社)

28. シェイクスピアの plain style について(1)　昭63年　愛知教育大学「外国語研究」24

29. シェイクスピアの plain style について(2)　平3年　愛知教育大学「外国語研究」25

30. 'The Concord of this discord' in *A*

Midsummer Night's Dream 平３年
Language and Style in English Literature (Eihosha)

31. Paradoxical Modes in *King Lear*(1)
平２年　愛知教育大学　「外国語研究」26

32. Paradoxical Modes in *King Lear*(2)
平３年　愛知教育大学　「外国語研究」27

33. シェイクスピアのことば遊び(1)
平５年　愛知教育大学　「外国語研究」29

34. シェイクスピアのことば遊び(2)
平６年　愛知教育大学　「外国語研究」30

梅田先生との思い出

中　村　正　廣

昨年の春先の頃だったと記憶している。近年外国語教室の人事移動は煩雑を極めており，教室の中で一番苦慮なさっている菅野先生がふと個人的に，これから大変なことが起こるよ，教室は解体するよ，と漏らされたことがあった。主任を任された手前，一体この時期に誰が，とスタッフ諸氏を見回したことは今でも忘れられないが，ついぞ梅田先生のことは頭に浮かびもしなかった。後で伺ったところによると，随分前から先生は悩んでおられたとのことである。

忙しい大学の授業や多端な校務の間に，次から次へと学問的業績を挙げられた先生の活躍ぶりは，若輩門外漢の私がいろいろと述べるのも口幅ったいことなので，英語学とシェイクスピアの専門家，それに先生が育てられた愛教大出身の前途有偽の学究，特に先生の著書『シェイクスピアのことば遊び』に譲ることにして，ここでは私的な回想に終始したい。

私が前任校から愛教大に赴任してもう六年になる。家族を抱えての転勤，それも大阪から先は西日本とは全く違う人間が住んでいると信じて疑わない田舎者である。不安と期待の入り交じった中，着任したとき，幾人かの教室の先生方にお世話になり，感謝の極みに思った。そのうちのおひとりが梅田先生で，赴任後もひとかたならぬお世話になった。

今でもはっきり心に残っているのは，このように申し上げるのは先生には大変失礼なことかもしれないが，初めてお会いしたとき，まるで数年来

の旧知であるかのような親近感を覚えたことである。洲原池の周囲をご一緒に散歩したり，昼食をご馳走して頂いたり，父を幼くして亡くした私にとっては父親のような存在でもあった。話題は英語学，英文学，教育から，読書，子育てにまで多岐に渡った。なぜか終戦直後の食糧事情や終戦時の教師たちの動揺と豹変ぶりについての話しは興味深いものがあった。

ところが先生には相手が若輩であれ，人にご自分の価値観を押し付けるところが全くないのには大いに驚かされた。人生の先達である。研究室に閉じ込もっておられたかと思うと，野球から水泳，そば作りからコーヒーの豆挽きまで，趣味と健康づくりに全力を傾倒される先生である。自ずと先生の口からつばきが滝の飛沫さながらに飛び出してくる。それでいて先生より一回りも年下の私に対して，押し付けるようなことは全くなさらない。いつも舌足らずの私の意見にも快く耳を傾けられ，先生に対する親近感を温かく受け止めてくださった。

当然のごとくシェイクスピアのことはいつも話題に上ったが，あたかも奥様のことを話されるみたいに，大事なものを他人に見せる恥ずかしさと誇りが入り交じったようなご様子であった。先生がシェイクスピアのご研究を始められたのは，子供さんがご病気になられたときのことで，苦悩の問いかけに答えてくれる作家だと確信して飛びついたというお話しは，お付き合いをさせていただいている者で知らぬ者は恐らくないだろう。だから人の誕生から結婚，老い，死といった人生のありようのことになると，先生はいつもシェイクスピアの言葉を引用される。世界は劇場，人生は芝居，人間は役者と信じたシェイクスピアの言葉（ことば遊び）は，先生が言われるように，ことば遊びを駄洒落として不真面目なものとして排除しがちな現代人にとって，新鮮な視点と人生観を提供してくれるのは確かだ。ともあれ，先生のお話を伺っているときはいつもなるほどと感心ばかりしていた。

先生が口癖のように引用なさる言葉の中で，不勉強の私がはっきりと記憶しているものがひとつだけある。

"Second childishnesse, and meere obliuion,
Sans teeth, sans eyes, sans taste, sans euery thing."

『お気に召すまま』からの引用である。貴族ジェイクイズが「世界はこれ芝居なり」と始めた人の一生を飾る言葉である。人間の老いはまず歯に始まり，次に視力，味覚の衰えと続き，その後は再び嬰児，忘却の世界へ帰還するというのである。先生はいつも，まさにこれ至言，とおっしゃられていた。

スタッフの中で一番の活動家で美食家の先生にとっては，まだまだこれはことば遊び（「個人的経験を待たずに読者が知る真実」と若輩の私が勝手に解釈しても，先生は許して下さるに違いない）に属する名言だと私は信じている。先生が適当な息抜きを織り混ぜながら，これからも精力的にご研究を続けられ，新天地でシェイクスピアについてまた著作を出版されることを，先生を尊敬申し上げる者のひとりとして，願っている。